

連載 プロマネの現場から 第177回 「人生は経験の合計」である

蒼海憲治(大手 SI 企業・製造業系事業部門・技術総括部長)

「ゼロで死ぬ」という刺激的なタイトルを目にして、すでに手に取られた方も多いかもしれませんが、今回は、新しい年を迎えるにあたって、ビル・パーキンスさんの『DIE WITH ZERO 人生が豊かになりすぎる究極のルール』(*1)を紹介したいと思います。

本書の冒頭、イソップ寓話の中でも特に有名な「アリとキリギリス」がたとえ話として取り上げられています。春から夏、そして秋まで、勤勉なアリは冬の食料を蓄えるためにせっせと働き続けます。その一方、気楽なキリギリスは自由に遊んで過ごします。その結果、冬が到来したとき、アリは生き残りますが、キリギリスには飢え死が待っています。この寓話の教訓は、単なる勤勉の大切さにあるのではなく、ビルさんにとって、人生には働くべきときと遊ぶべきときがある、というものだ、といいます。すなわち人生を存分に楽しんだキリギリスと、多額の資産を積み上げることができたものの若さを失ったアリ、という見方もできます。そのため、キリギリスは、もう少し人生設計を考えるべきだったのはもちろんですが、それと同時に、アリはいつ遊ぶことができるのだろうか、と問いかけています。つまり、アリはもう少し人生の意味を考えるべきなのではないか。現代の価値観は、勤勉に働き、喜びを先送りするアリの生き方を美德としすぎており、キリギリス的な生き方の価値が軽視されすぎているのではないか。本書は、アリとキリギリスの生き方の中間にある最適なバランスを見つけることになる、といいます。

本書の一番重要なメッセージは、「人生で一番大切な仕事は『思い出づくり』」である、という指摘になります。私たちにとって「なぜ経験が大切か」を十分に理解し、一刻も早く経験への投資を始めるべきであること。なぜなら、『人生は経験の合計』に他ならないからです。

「人生は経験の合計だ。あなたが誰であるかは、毎日、毎週、毎月、毎年、さらには一生に一度の経験の合計によって決まる。最後に振り返ったとき、その合計された経験の豊かさが、どれだけ充実した人生を送ったかを測る物差しになる。

だからこそ、この人生でどんな経験をしたいのかを真剣に考え、それを実現させるために計画を立てるべきだ。

そうしなければ、社会が敷いたレールのうえをただ進むだけの人生になってしまう。いつかは目的地(死)にたどり着くが、その道のりは自分自身が選びとったものではない。

残念ながら、そんな人生を生きている人は多い。こう言い換えてもいい。彼らは人生という名の井戸から、毎日ポンプで水を汲んでいる。

だがその水を、小さなコップでしか受けていない。コップはすぐにいっぱいになり、水が溢れてしまう。こうして喉の乾きを十分に潤せないまま時は過ぎ、人生の終わりを迎えるのだ。なんともったいないことだろうか。

人生最後の日に、満足のいく経験に満ちた人生を送れなかったと気づいたときの後悔がどれほど大きなものか、想像してみしてほしい。テレビドラマ『ダウントン・アビー』の執事、カーソンはこのことを見事に表現している。

「人生でしなければならない一番大切な仕事は、思い出づくりです。最後に残るのは、結局それだけなのですから」>

『人生は経験の合計』であり、経験は、私たちの思い出になり、記憶に残ります。私たちにとって、経験は一種の投資であり、株式投資に配当があるように、経験には、思い出という配当があります。そして、人生にとってこの「思い出の配当」が極めて大切になります。

なぜ、経験が投資対象とみなせるのか？

「経験も同じだ。時間や金をかけて何かを経験するのは、その瞬間を楽しむためだけではない。経験は私たちに、尽きることのない「配当」を与えてくれる。

それが、・・・「記憶の配当」だ。

経験は、継続的な配当を生み出す。なぜなら、人間には記憶があるからだ。

私たちはSF映画の登場人物とは違い、朝、過去の記憶が一切消された状態で目を覚ましたりはしない。頭のなかには、すぐに取り出せる記憶がぎっしり詰まっている。

記憶は私たちが現実世界でうまく生きていくために欠かせない。たとえば目の前に「丸いノブが突き出た大きな長方形のパネル」が現れたとき、私たちは毎回「これは何だろう？」と考え込んだりはしない。過去の記憶から、それがドアだということを、瞬時に理解できる。もちろん、そのドアを開く方法も知っている。

つまり、ドアがどんなものかを一度学べば、生涯にわたって大きなリターンが得られる。死ぬまでに、何度ドアを開けるかを考えてみてほしい。

バカげた喩えかもしれないが、記憶を将来への投資だと考えれば、その効用を理解しやすくなる。記憶は配当を生み出し、私たちの生活を豊かにしてくれる。

自宅の台所でコーヒーを淹れている人を見たとき、私たちはその人を見知らぬ誰かとして接したりはしない。相手が自分の愛する人であることも、なぜその人を愛しているのかも知っているからだ。その人と親しくなった経緯、過去の会話、共有してきた経験が、相手に対して抱く今の気持ちをつくっている。>

つまり、経験には、「記憶の配当」「思い出の配当」があるから投資の一種とみなせるのです。

《経験に投資する場合も同じだ。経験からは、その瞬間の喜びだけではなく、後で思い出せる記憶が得られる。》

投資による資産形成が、ある一定の金額を超えると複利の効果により雪だるま式に増えることと同様に、この「記憶の配当」「思い出の配当」も、経験を増やすことによって、雪だるま式に増え、「幸せ」になれる、といます。

《元の経験から副次的に生まれる経験は、まさに記憶の配当だと言える。その経験は、積み重なっていく。忘れがたい旅を振り返ることで、どれくらい多く、豊かな時間を過ごせたのだろうか。繰り返し思い出すことで、元の経験よりも多くの喜びが得られることである。》

金を払って得られるのは、その経験だけではない。その経験が残りの人生でもたらす喜び、つまり記憶の配当も含まれているのだ。》

十代・二十代に経験した貧乏旅行やアルバイト、部活での経験、寸暇を惜しんで読んだ本の読書体験は、元の経験はもちろんのこと、その後、その経験を家族や友人と共有することも新たな経験となり、その後、何百回となく思い出すたびに得られる満足感は、お金で買えない価値のように思えます。

しかし、経験の投資が重要である一方、経験の投資に慣れている人は少ない、と指摘します。その理由は、いざ投資しようとする、経済的な利益にばかり目を向けてしまうからだ、と指摘します。

50歳からの投資において、残りの人生を考えると、年利3%のリターンは複利の効果を享受するには若干短いかもしれません。しかし、経験に投資するのであれば、50歳からであっても、その後の人生を変えられる可能性がある、といます。

人生にリターンをもたらす経験はさまざまあります。たとえば、何かを学ぶ、スキーをする、ゴルフをする、ペットを飼う、旅行をする、美味しい食事を楽しむ、ボランティアをする、楽器を演奏する、映画やコンサートを鑑賞する、本を読む・・・などなど。

本来、お金を稼ぐのは、このような経験をするためであり、経験を数多く積むことにより、金融商品と同じように、「記憶の配当」「思い出の配当」のリターンを得ることができるようになります。

もちろん、老後の備えが必要であることは間違いありません。しかし、その一方、「老後で何より価値が高まるのは思い出」になります。

金融商品への投資において、複利の効果を享受するためには、できるだけ早く投資を開始することが重要になります。同様に、「記憶の配当」「思い出の配当」を得るためにも、20代で何かを経験した方が、50代で経験をするよりも、より長期間にわたって、リターンを得続けることができます。「記憶の配当」「思い出の配当」のリターンの方が、元の経験を上回ることもあります。

それでも、たとえいくつになっても、経験を積み記憶の配当を得ることは、人生を充実させるためにはとても大切だと思います。

日本においても、老後の「年金2000万円問題」が不安視される一方、日本人の貯金額が最大になるのは死ぬ時です。それは「いざ」という時の備えと、長生きリスクへの対策の結果だと思っています。

大前研一さんは、「高齢者のやけっぱち消費を狙え！」（*2）といい、貯めたお金を天国までは持っていけない高齢者向けの消費ニーズにこたえるサービスの提供を通じた日本経済の消費喚起策を提唱されています。しかし同時に、「なげやり消費」「やけっぱち消費」は本当に納得し満足したお金の使い方ではないことも指摘されていました。勤勉さの美德を大切にするとともに、人生で一番大切な仕事は「思い出づくり」ということを肝に銘じて、そのために経験に必要な消費は「人生にとっての投資」と思って、前倒しにしていくことが大切だと思っています。

（*1）ビル・パーキンス『DIE WITH ZERO 人生が豊かになりすぎる究極のルール』、児島修・訳、ダイヤモンド社、2020年刊

（*2）大前研一「高齢者のやけっぱち消費を狙え！」理論ではなく「心理」が経済を動かす <https://toyokeizai.net/articles/-/115752?page=3>